アート・リサーチセンター所蔵友禅図案の〈野球柄〉についての考察

根岸 貴哉（立命館大学大学院先端総合学術研究科表象領域）
枝木 妙子（立命館大学大学院先端総合学術研究科表象領域）

要旨

本稿では、アート・リサーチセンターに所蔵されている友禅図案のなかに含まれる〈野球柄〉図案に注目し、それらに見られる選手の特定および推定を、当時の野球雑誌等を参照することで行った。この作業を通して、図案の制作年代が、1930年以降であることが明らかにされた。当該資料は野球史的に意義があるものであり、また同時に、この調査結果は友禅図案資料全体の年代特定にもつながる。

abstract

Among the historical Yuzen patterns Ritsumeikan University Art Research Center collects, this paper focuses on baseball patterns, which show team names and baseball players. By studying baseball magazine in those days, this paper identifies names of these players and, for some patterns, it could almost specify exact year of the production based on information of baseball activities. In this way, the production years of these yuzen patterns were identified as around 1930. The conclusion argues the significant contribution of the study of Yuzen baseball patterns to the historical study of commercial usage of baseball players' images, and to specify the production year of other Yuzen designs.

はじめに

立命館大学のアート・リサーチセンター（以下、ARC）には、着物の図案が所蔵されている。これらは京都市の染織業者が廃業した際に、手放されたものである。これらの資料には、ARCに収蔵される段階で付けられた資料番号があり、まとまりごとに1から11群までの番号が付いている。

本稿では、そのなかでも6群を取り扱う。6群の資料番号は、群番号 - 箱番号 - 束番号 - 個別番号の順に付けられている。箱番号は購入時に入っていた段ボール箱に、任意の番号を付けたものである。束番号は、箱の中に資料が何枚か重ねて折り曲げられて入っていたために束ごとに付けられた番号である。古書店が染匠から買い取った際に、束をそのまま箱詰めしていたため、束の中で保管時の順番は変わっていないと思われる[1)]。最後に個別の番号がふられている。

6群は、型友禅の製作過程で使われていた資料である。型友禅では型をおこすために実物大の図案が描かれ、その後、型をおこし、型が正しく彫られているかを確認するための絵刷りが刷られる。6群には、この図案と絵刷りの2種類が混在している。またデザインは、文様が繰り返し配置されているものが多く見られる。資料の形態は1枚の紙であり、冊子のようにはなっていない。大きさは補修されているものや資料の半分が失われ

ているものなどがあるため、一概にはいえないが、多くのものの横幅は着物の反物の幅（約36cmから約43cm）に合わせて作られており、縦幅は約60cmから約70cmである。

本稿ではそのなかでも、野球をモチーフにした図案に注目する。これらの図案を〈野球柄〉図案と呼称する。整理途中の現時点で6群は、約1万3千枚が確認されている。そのなかに、〈野球柄〉図案を5枚発見することができた（図1、2、3、4、5）。これらの図案の色づかいは、男性用の襦袢や羽裏などに現在も用いられる典型的なものである。

ARCの〈野球柄〉図案は、2種類に分類することが可能である。1種類目は図1、図2のように他の球技と取り合わせて競技風景を描いたものであり、2種類目は図3、図4、図5のように具体的な選手を描いた図柄である。図3、4、5は年代を特定できる可能性を持つ数少ない図案である。そのため本稿では、この3枚の図案を中心に取り扱うこととした。これらの図案の年代特定は、現在のところ図案が作られた時代が明らかにされていない6群資料全体の年代を推測できるという点でも有意義である。

本稿では、まず近代着物に関する先行研究を整理し、次に図3に描かれた早稲田大学・慶應義塾大学（以下、慶應大学）の選手の特定を行う。そして図4、5に描かれた六大学野球の選手の特定を目指す。最後に描かれた選手たちが活躍した年代をまとめ、図案が作られた年代を特定する。

1　先行研究の整理

近年の着物研究には、近代の着物の柄に時事的な話題を取り入れたものが存在することを指摘したものがある。本資料のなかにも、天皇の即位を祝って作られた大典模様が存在することが明らかにされている[2]。

このような時事を取り入れた柄のなかには、とくに「面白柄」と呼ばれるものがある。藤井健三は、この面白柄について「漫画や流行風俗を画材にして、また時事ニュースや舶載のキャラクターを、さらに芸能や娯楽、社会事件といったものを風刺と滑稽を込めて面白く扱い、通例の表現をせずに時の絵画美術や商業美術の技法や表現を取り入れ、タイムリーな時代描写を映し出している斬新な図案」と説明している[3]。今回取り上げる〈野球柄〉図案は、この面白柄の一種である。

面白柄に関連する文献としては、乾淑子が記した『着物柄にみる戦争』[4]が挙げられる。乾は、戦争柄の着物は、そこに描かれている戦艦やヘルメットの形などから、年代が特定できることを明らかにした。また、近代以降にみられる戦争柄は、近代以前から存在する面白柄や吉祥柄の一端として受容されていたことが指摘されている。

しかし、このような面白柄の着物は生産のごく一部である。着物の古布を主に扱っている古美術店の店主への聞き取り調査では、扱っているもののうち数パーセントしか面白柄は出てこないということだった[5]。また京都の着物問屋が出自の女性の着物コレクションに、面白柄は発見されなかった[6]。6群資料も大半は古典的な柄で占められている。面白柄は、子供の着物や女性の帯として使われることもあるが、男女ともに襦袢や羽裏として用いられることが多い[7]。襦袢や羽裏は、建前上、人の目に触れないことが前提のものである。そのため、個人的な好みを反映することが容易である。しかし実際は目にすることもあり、目にした人を驚かすために、手のこんだ裏地を付けるという習慣があった。

2　早慶戦の図案に描かれている選手たち

はじめに、今回発見した図案のなかで、唯一文字が書かれている図3を検討する。本図には、野球ボールや野球選手と思われる人物などが写実的に描かれている。

その中のボールには「KEIO」と書かれ、年代も書かれていることが確認できる。しかし、その年代は、途中で切れてしまっているため、図案からはどういった数字が書かれていたのかは推定することしかできない（図6）。

次にローマ字で書かれた部分を検討する。「WASEDA」、「KEIO」という大学の名前が書かれていることがわかる。以上のことから、ここに描かれた人物は、早稲田大学、慶應大学の選手たちであろうという推定に達する。

さらに、この図案にはアルファベットが筆記体で書かれている。これらは、「Kuroki」、「Tominaga」、「Shotaro」、「Date」、「Takanobu」、「Ikawa」、「Ueno」、「Doi」、「Hi-koshimoto」と読み取ることができる。「腰本寿」、「小川正太郎」、「伊達正男」という人物がそれぞれ早稲田大学・慶應大学に関係し、近しい年代に在籍しつつも野球殿堂入りをしている[8]。

では、この三人以外の人物は、同時代に活躍した選手なのだろうか。それを調べるため、『早稲田大学野球部百年史』[9]と『慶應義塾野球部百年史』[10]、さらに『野球界』を参照した。

『野球界』は、1908（明治41）年から1959（昭和34）年まで発行されていたスポーツ雑誌であり、最も代表的な野球を取り扱っていた雑誌である。当時は、陸上競技やラグビーなど、ほかのスポーツも若干ではあるが扱っていた。今回は、前述の3名が在籍していた期間を中心に調査を行った。この期間に関しては、野球の記事が約8割を占めている。そのなかでももっぱら取り扱われていたのは大学野球、とくに六大学野球である。他の地方や現在で言うところの東都野球リーグのチームも存在はしていたが、あまり取り上げられることはなかった。中学野球（現在の高校野球）に関しても、有望な選手がどの程度有望か、そしてその選手の進路、例えばどの大学に進学するのか、といったことに注目している記事が多い。そのため、今回のような、早慶戦や六大学野球に関する情報は多い。また、今回取り上げた図案のようなデフォルメされたイラストも多く見られる。

調査の結果、前述のローマ字で示されていた選手たちはすべて同時代に実在したことがわかった。まず、早稲田大学の選手は、黒木正己、富永時夫、小川正太郎、伊達正男、といった選手である。黒木正己は1925（大正14）年に相馬中学から入部し、主に三塁手として出場していた選手である[11]。のちに、早稲田大学野球部の主将もつとめ、1931（昭和6）年度に卒業している[12][13]。

富永時夫は1926（大正15/昭和元）年に入部し、主にショートを守っていた[14]。1931（昭和6）年の日米野球にも選手として選出され[15][16]、1931（昭和6）年度に卒業[17]。

小川正太郎は左投手で1929（昭和4）年に入部し1931（昭和6）年まで出場している選手である。1年生から活躍したが、病気のため、活躍時期は長くない。1931（昭和6）年の登板を最後に選手生活を終える[18]。

伊達正男は1928（昭和3）年に入部し、1932（昭和7）年度に卒業、投手や捕手、一塁手として活躍した選手で、1年生の春にして首位打者に輝いた[19]。日米野球にも出場し、1931（昭和6）年春の早慶戦では史上初の3連続完投をするなど輝かしい成績を残している。1988（昭和63）年には、日本の野球殿堂にも選ばれている[20]。

次に慶應大学の面々は、楠見幸信、井川喜代一、上野精三、土井壽蔵、そして当時の監督である腰元寿である[21]。

「Takanobu」と書かれているのは、おそらく楠見幸信であろう。多くの場合、「幸信」は「ゆきのぶ」と読まれるが、「たかのぶ」と読むことも可能である。彼以外に、「たかのぶ」と読むことができる選手は同時期には確認できなかった。楠見幸信は、1926（大正15/昭和元）年に入部し、1931（昭和6）年まで在籍していた右投げ右打ちの外野手で、主にセンターを守り、トップバッターとして起用されていた選手である[22][23]。

井川喜代一は1928（昭和3）年に入部し、1934（昭和9）年まで活躍している選手である[24]。慶應大学の主力打者として活躍し、外野を守り、ときには投手としての登板も確認できる[25]。

上野精三は1929（昭和4）年に静岡中学から入部し、1933（昭和8）年度に卒業した投手である[26]。1年生の時から活躍し、大学通算12勝、勝率は7割5分という好成績を残している[27]。

土井壽蔵は投手、二塁手として出場している。1930（昭和5）年に入部し1935（昭和10）年まで活躍した選手である[28]。入部翌年の早慶戦には二塁手として先発し、途中投手をつとめ、また二塁手に戻っている記録が残っている[29]。

腰元寿は当時の慶應大学野球部の監督であり、現役時代は内野手で、1917（大正6）年には首位打者にも輝く選手だった。1916（大正5）年には慶應義塾の普通部の監督として、甲子園で優勝を経験している。1926（大正15/昭和元）年に慶應大学野球部監督に就任し、1934（昭和9）年まで監督をつとめ、15シーズンで7回の優勝に導き慶應黄金時代を築き上げた[30]。

以上のことから、この図案は土井が入部した1930（昭和5）年以後に作られた図案であるといえる。

3　六大学の図案に描かれている選手たち

本節では図4、5を取り上げ、その年代を考察する。これらの図案は、おそらく同じ選手が描かれたものである。この図案は前節で取り上げた図案とは異なり、選手たちがデフォルメされて描かれている。また、早稲田大学、慶應大学の両校の選手しか描かれていなかった図3の図案に対して、こちらはユニフォームから六大学野球の選手、すなわち早稲田大学、慶應大学、法政大学、東京帝国大学（以下、帝国大学）、立教大学、明治大学の選手とわかる。この図案の選手を特定するなかで、『野球界』に類似性の高い恰好の写真やイラストを発見することができた。図4、5には、名前等の文字が書かれていないため、顔やフォームなど、外見上の特徴から特定を行った。ピッチングフォームには、時代の潮流などはあるものの個人的な特徴がある。足の角度などがほぼ一致することは、特定の選手であることを確定する手がかりとなる。また、その選手ごとのイメージもあり、彼らの写っているプレー中の写真やイラストのポーズにはある一定のパターンを見出すことができる。

図4の早稲田大学の選手とほぼ動きが一致する選手がいた。左投手という特徴的なこともあり、図7と図8の類似性の高さから早稲田大学の選手は前述した小川正太郎投手であると推察できる。その風貌が似ており、さらには投げ終わりの足の角度がほぼ一致している。

早稲田大学の選手が小川正太郎であれば、図案のなかの他の選手もおそらく同時代に活躍した六大学の選手であろうと推察できる。そこで同時代に活躍した六大学野球の選手の画像や顔を、『野球界』を中心に調査した。

調査を続けるなかで、法政大学の選手にフォームと顔が酷似している人物を発見した。それは若林忠志である（図9）。彼は1929（昭和4）年に法政大学野球部に入部し1934（昭和9）年度に卒業した。ハワイ育ちの選手であり、様々な球種を日本に持ち込んだとされている。法政大学を3度の優勝に導き、後に大阪タイガースに入団。最高勝率2回、最優秀防御率2回、最多勝利1回、最優秀選手2回と素晴らしい活躍をみせる[31]。

次に帝国大学の選手である。投げている場面が描き出されているこの選手は、右利きであること、そしてメガネをかけていることがわかる。当時の『野球界』をみると、メガネをかけた選手に高橋一という帝国大学の投手がおり、明治大学に勝つなど活躍していた選手であることがわかった[32][33]（図10）。彼は、1930（昭和5）年に入部し、1932（昭和7）年度に卒業をしている[34]。おそらくこの投手はこの高橋投手であると推定される。

ついで立教大学の選手である。画像からは、右投手であることがわかる。しかしながら、フォームや顔の特徴からは、この選手がどういった人物かは判断がつかなかった。そのため、同年代に立教大学で活躍した選手の調査を行った。早稲田大学の小川、法政大学の若林、そして帝国大学

の高橋と同時期に活躍した立教大学の右投手でエース級の活躍をしたのは、縄岡修三投手である。1925(大正14)年、山陽大会で広陵中の縄岡投手は参考記録ながら、7回のノーヒットノーランを記録している。1926(大正15/昭和元)年に立教大学に進学し、エースとして活躍、1930(昭和5)年度に卒業している[35)36)]。また、同時期の立教大学にはもう一人、辻猛という右投手がいた(図11)。この投手も成績から考えると、エース級の活躍をしており、1926(大正15/昭和元)年から在籍し、1931(昭和6)年度に卒業をしている[37)38)]。また、1931(昭和6)年には日米野球にも選ばれている[39)]。フォームや顔からも、どちらとも断定しがたい。しかしながら、この両者のいずれかであることは、ほぼ間違いないであろう。

慶應大学の選手は打者が描かれており、右打者ということがわかる。右打者で同時代に活躍した選手のみを取り上げるならば、山下実は活躍した選手ではあるものの、左打者だったために除外される。当時の慶応大学の中心的な右打者は宮武三郎と井川喜代一であるため、この二人のうちのいずれかであると考えられる。この二人を比較すると、宮武よりも井川のほうが、顔が似かよっている。そうしたことから、井川の可能性が高いと考えられる(図12)。

最後に、明治大学の選手である。この図柄からは投げていることがわかる。この時期に明治大学で活躍していた選手は田部武雄であり、1928(昭和3)年に入部し、1931(昭和6)年度に卒業している[40)41)]。だが、彼が主戦としていたのは内野手や外野手であり、投手としての登板もあるものの、エースとしての活躍ではない。当時、エースとして活躍していたのは鬼塚格三郎。彼は1927(昭和2)年に入部、1931(昭和6)年まで在籍していたことが確認できる[42)]。外見上は、どちらでかは断言できない。また、そもそもこの図柄からは「投げている」ということはわかるものの、それが守備のなかでのいわゆる「送球動作」なのか、「投球動作」なのかを見極めることは極めて困難である。以上のことから、この明治大学の投手は、田部か鬼塚であるという推察まではできるものの、それ以上の判断をすることはできない。

こうした選手たちはおおむね、入部年度などに違いはあるものの、1920年代後半から1930年代前半頃まで活躍した選手である(表1)。また、高橋の入部が1930(昭和5)年であることから、六大学の図案も1930(昭和5)年以降に制作されたと考えられる。

おわりに

以上のことから、この3枚の図案が制作された年代は、1930(昭和5)年以降である。

さらに野球史的な観点から推察することによって、二つのことを付言することができる。第一に1932(昭和7)年には政府によって、あまりの野球人気のために「野球ノ統制並施行ニ関スル件」、いわゆる「野球統制令」が発令された。野球熱の証明にほかならない。同時に、野球統制令には「選手ハ広告、商品若ハ営利、宣傳ニ利用セラルル虞アル記事等二自己ノ名義、肖像等ヲ利用セシメザルコト」[43)]という記述がある。現在、新聞や雑誌以外に、どのような商品展開がされていたかを示す資料は見つかっていない。いずれにせよ、統制令において商業化の利用が禁止された影響を考慮に入れれば図案は1932(昭和7)年以降に作られた可能性は薄いと考えられる。

第二に、同時期に活躍しながらも描かれていない、見過ごしてはならない重要な人物たちがいる。山下実は左投げ左打ちの強打の一塁手である。高校時代には甲子園にも出場し、ホームランを放っている。慶應大学進学後もその打棒で慶應黄金期を支え、同時代の大リーガー、ベーブ・ルースになぞられ「ベーブ」というあだ名をつけられるほどだった。宮武三郎は投打ともに当時の慶應大学を支えたプレイヤーで、彼もまた野球殿堂特別表彰を受けている。高校時代から高松商業で甲子園に出場しており、全国にその名を轟かせていた。

慶應大学野球部に入部後も活躍し、1928（昭和3）年に慶應大学が10戦10勝をしたときには、彼のみで5勝をあげる活躍をしている。また、神宮球場の第1号ホームランや、若林忠志から場外ホームランも打ち、当時の慶應大学の象徴ともいえる選手だった。

これまで扱ってきた図案では、その時代に活躍した選手たちが描かれていた。野球史という観点からすれば、山下、宮武の両者が描かれていないことには疑問の余地が残る。これらの人物が描かれていないのはなぜなのか。これはあくまでも推察であるが、山下と宮武は1930（昭和5）年まで活躍している。彼らが仮に卒業していると考えれば、この図案は1930（昭和5）年に来シーズンに向けて制作された、あるいは1931（昭和6）年にシーズンがはじまってから制作されたという仮説をたてることができるのではないか。

また、慶應大学の水原茂、早稲田大学の三原脩も、当時の大学野球界、そしてのちのプロ野球界に大きな影響を及ぼした人物だが、描かれていない。

水原は1928（昭和3）年に慶應大学野球部に入部している。投手と三塁手として活躍した。後にプロ野球へと進み巨人で活躍[44]。そのライバルとして知られるのが早稲田大学の三原である。早稲田大学野球部に入部後、すぐにレギュラーを獲得。内野手として活躍した。後にプロ契約第1号の選手となる。選手引退後は、巨人、西鉄、大洋、近鉄、ヤクルトなどで監督を務め、日本ハムの球団代表も務める[45]。

なぜ彼らは描かれなかったのか。三原は黒木とポジションがかぶっていたために、上級生である黒木が優先されたと考えることが可能である。しかし水原は1930（昭和5）年からすでにレギュラーポジションを得て中心選手として活躍していた。対して土井は1930（昭和5）年時点ではレギュラーではなく、その座を確かにするのは1931（昭和6）年である。両者ともに、大学に入る前から全国区の選手だった。なぜ、水原よりも土井が優先されたのか。このことについては、議論の余地がある。だが、これらの推察を考慮に入れるのであれば、制作年代は1931（昭和6）年周辺と考えることもできるのではないだろうか。

以上のことから、本稿で取りあげた〈野球柄〉図案が制作されたであろう年代は、土井が入部した1930年以降であると考えられる。また推測の域を出ないものの、宮武、山下の両選手が慶應の代表的選手だったにもかかわらず描かれていないこと、また小川正太郎が描かれていることから、1931（昭和6）年前後に制作された可能性が高いと推察することができるだろう。

また、切れてしまっているために推定しかできない数字の書かれたボールも、おそらくは「1931」と書かれていた可能性が高いと考えられる（図6）。

さらに、これらの推察をもとにすれば、二つのことを付け加えることができる。一つは、1931（昭和6）年のシーズンのものと考えるのであれば、立教大学の選手は1930（昭和5）年までしか在籍していない縄岡ではなく、1931（昭和6）年まで在籍していた辻ということになる。第二に、宮武や山下が描かれていないことから、1931（昭和6）年に行われた日米野球を記念して作られたものでもないといえるだろう。宮武や山下は当然この日米野球に選出されている当時のスター選手だった。また、同時にそれは、1931（昭和6）年以降に過去のスター選手たちを、このデザインのなかに一同に会するようなものでもないことを意味する。すなわち、1930（昭和5）年のシーズン終了後から1931（昭和6）年にかけて、まさにその時代に活躍している選手を描いたきわめて即時性の高い図案であるということが、先行研究との比較を通しても考えられる。

〔注釈〕

1) 束の内容は分類されておらず、番号などが規則性を持ってまとまっていない。

2) 「新収蔵資料展――友禅下絵と乾板写真から」展パンフレット、立命館大学アート・リサーチセンター、2010年

3) 藤井健三「裂は世につれ」『別冊太陽――昔きものと遊ぶ』平凡社、2001年、p. 95

4) 乾淑子『着物柄にみる戦争』インパクト出版会、2007年
5) 2013年10月7日、悠々亭にて、枝木が行ったO氏へのインタビューより。
6) 2012年10月8日、枝木による東京のI氏宅における調査より。
7) 市田ひろみ『羽裏――日本の粋と伊達 岡重コレクション』アシェット婦人画報社、2006年
8) 野球体育博物館編『野球殿堂2012』ベースボール・マガジン社、2012年
9) 飛田忠順編『早稲田大学野球部百年史――上巻』早稲田大学野球部、2002年
10) 慶應義塾野球部史編集委員会編『慶應義塾野球部百年史――上巻』慶應義塾体育会野球部三田倶楽部、1989年
11) 『野球界』Vol.21, No.9、野球界社、1931年
12) 飛田忠順編『早稲田大学野球部百年史――上巻』早稲田大学野球部、2002年、pp. 310-325
13) 当時の大学野球は、留年などをして出場を続けるケースが状態化していた。
14) 卒業に関しては、「卒業年」ではなく、「卒業年度」で統一する。
15) 波多野勝『日米野球史――メジャーを追いかけた70年』PHP研究所、2001年、p. 36
16) 当時の日米野球の日本代表選手は、そのほとんどが大学野球の選手であった。
17) 飛田忠順編『早稲田大学野球部百年史――上巻』早稲田大学野球部、2002年、p. 325
18) 『早稲田大学野球部百年史――上巻』には選手の入部年、卒業年が記されているが小川の卒業年は記されていなかった。
19) 飛田忠順編『早稲田大学野球部百年史――上巻』早稲田大学野球部、2002年、pp. 278-337
20) 野球体育博物館編『野球殿堂2012』ベースボール・マガジン社、2012年、p. 92
21) 『慶應義塾野球部百年史――上巻』には選手の入部年は記されているが、卒業年についての記載はない。そのため慶應大学の選手については、出場年度や在籍者一覧などから推察している。
22) 慶應義塾野球部史編集委員会編『慶應義塾野球部百年史――上巻』慶應義塾体育会野球部三田倶楽部、1989年、pp. 186-193
23) 『野球界』Vol.21, No.9、野球界社、1931年
24) 慶應義塾野球部史編集委員会編『慶應義塾野球部百年史――上巻』慶應義塾体育会野球部三田倶楽部、1989年、pp. 175-235
25) 『野球界』Vol. 21, No. 9、野球界社、1931年
26) 慶應義塾野球部史編集委員会編『慶應義塾野球部百年史――上巻』慶應義塾体育会野球部三田倶楽部、1989年、pp. 187-224
27) 「慶應義塾体育会野球部――記録集（投手）」http://baseball.sfc.keio.ac.jp/team/record-pitching/（2015年10月1日閲覧）
28) 慶應義塾野球部史編集委員会編『慶應義塾野球部百年史――上巻』慶應義塾体育会野球部三田倶楽部、1989年、pp. 195-242
29) 松尾俊治『早慶戦90年』ベースボール・マガジン社、1993年、p. 39
30) 『慶應義塾大学野球部Since1888――エンジョイ・ベースボールの真実』ベースボール・マガジン社、2015年、p. 8
31) 山本茂『七色の魔球――回想の若林忠志』ベースボール・マガジン社、1994年
32) 『野球界』Vol. 20, No. 16、野球界社、1930年
33) 『野球界』Vol. 21, No. 9、野球界社、1931年
34) 『東京大学野球部90年史』一誠会、2010年、p. 394
35) 『野球界』Vol. 18, No. 11、野球界社、1928年、p. 59
36) 100年史編集プロジェクト編『立教大学野球部史』セントポールズ・ベースボール倶楽部、2011年、pp. 68-69
37) 立教大学野球部編纂委員会編『立教大学野球部史』セントポールズ・ベースボール倶楽部、1981年、pp. 31-38
38) 100年史編集プロジェクト編『立教大学野球部史』セントポールズ・ベースボール倶楽部、2011年、pp. 67
39) 波多野勝『日米野球史――メジャーを追いかけた70年』PHP研究所、2001年、p. 36
40) 野球体育博物館編『野球殿堂2012』ベースボール・マガジン社、2012年、p. 38
41) 駿台倶楽部編『明治大学野球部100年史』駿台倶楽部、2010年、p. 389
42) 駿台倶楽部編『明治大学野球部100年史』駿台倶楽部、2010年、pp. 60-73, 389
43) 大蔵省編「官報（1932年03月28日）」1932年、http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2958041（2015年10月21日閲覧）、国立国会図書館デジタルコレクション
44) 野球体育博物館編『野球殿堂2012』ベースボール・マガジン社、2012年
45) 野球体育博物館編『野球殿堂2012』ベースボール・マガジン社、2012年

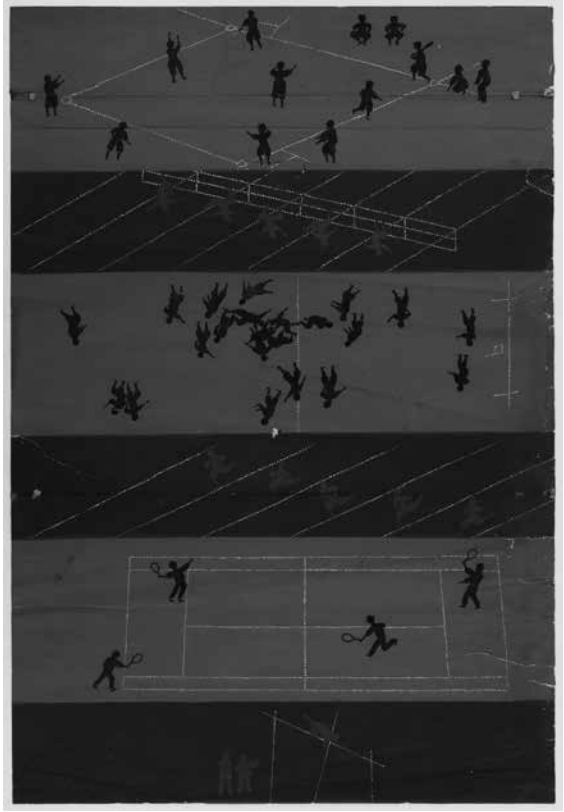

図1　6-22-14-1図案（寸法　580㎜×397㎜）

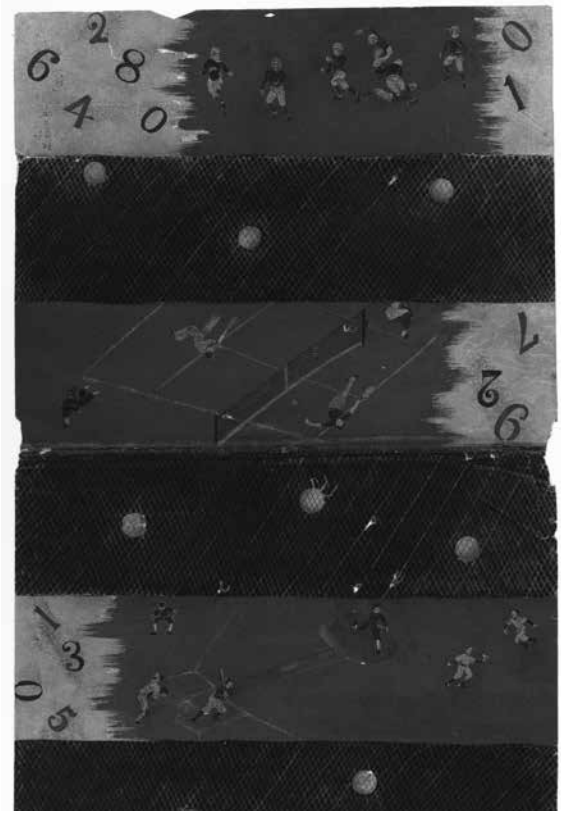

図2　6-23-28-30図案（寸法　630㎜×398㎜）

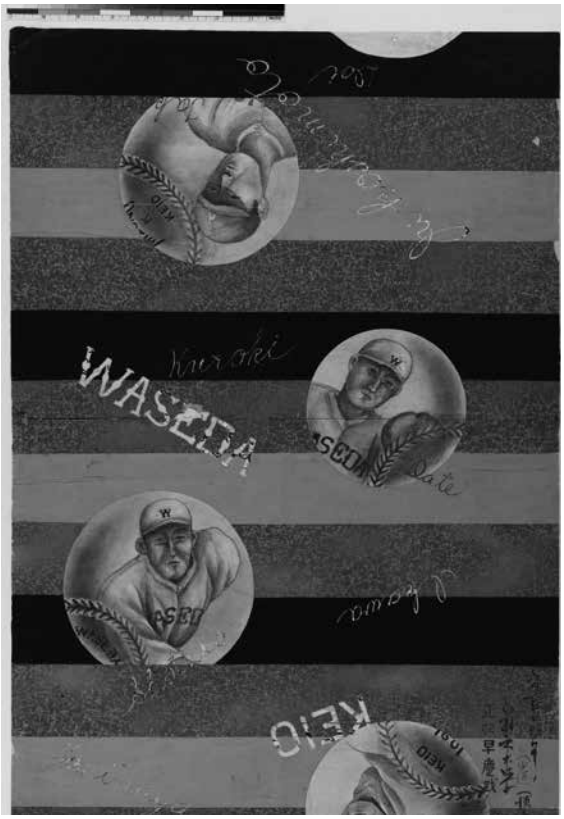

図3　6-18-7-15図案（寸法　642㎜×404㎜）

図4　6-28-9-80図案（寸法　624㎜×387㎜）

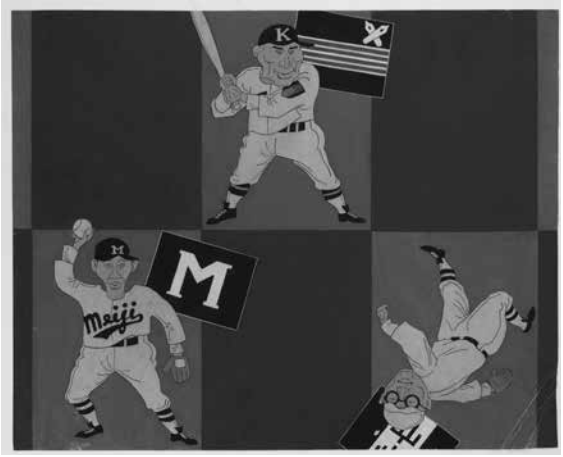

図5　6-32-34-1図案（寸法　314㎜×390㎜）

図6　6-18-7-15図案に書かれた年号らしき数字

図7　早稲田大学・小川正太郎
『野球界』Vol. 19, No. 9、野球界社、1929年より

図8　6-28-9-80図案に描かれた早稲田大学の選手

図9　法政大学・若林忠志
『野球界』Vol. 18, No. 8、野球界社、1928年より

図10　帝国大学・高橋一
『野球界』vol. 20, No. 16、野球界社、1930年より

図11　立教大学・辻猛
『野球界』vol. 19, No. 9、野球界社、1929年より

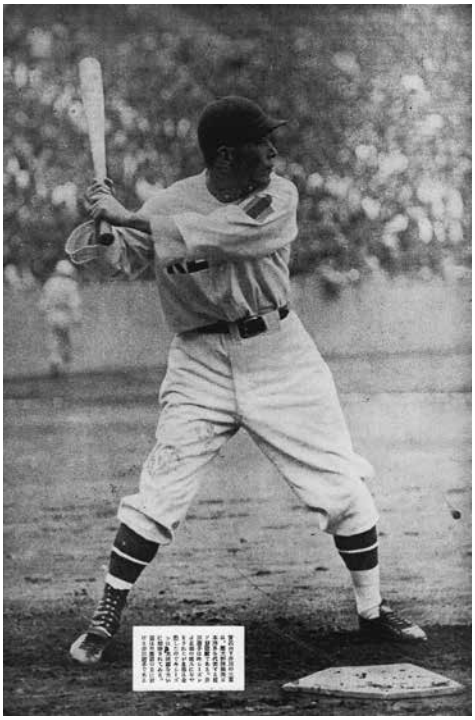

図12　慶應大学・井川喜代一
『野球界』Vol. 20, No. 3、野球界社、1930年より

表1　選手在籍一覧

	1925年	1926年	1927年	1928年	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年
黒木正己	■	■	■	■	■	■	■				
富永時夫		■	■	■	■	■	■				
伊達正男				■	■	■	■	■			
小川正太郎					■	■	■	(出場最終年)			
上野精三					■	■	■	■			
楠見幸信		■	■	■	■	■	■				
井川喜代一				■	■	■	■	■	■		
土井壽蔵						■	■	■	■	■	■
腰元寿		■	■	■	■	■	■	■	■	■	
若林忠志					■	■	■	■	■	■	
高橋一						■	■	■			
縄岡修三		■	■	■	■	■					
辻猛		■	■	■	■	■	■				
山下実			■	■	■	■					
宮武三郎			■	■	■	■					
田部武雄				■	■	■	■				
鬼塚格三郎			■	■	■	■	■				

※卒業年は年度で記載した。